

あとがきにかえて

——「思い出の記」小泉セツ——

この小泉八雲の妻・セツ夫人による随筆「思い出の記」は、一九〇四年（明治三十七年）に五十四歳で世を去った小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の没後、夫人が追憶とともに綴った私的な回想記です。

セツ夫人は、松江藩士・小泉弥右衛門えもんの次女として生まれ、一八九一年（明治二十四年）に八雲と結婚しました。当時、日本では西洋化が急速に進んでおり、八雲はその只中であって日本文化の深層に魅せられ、自らの文学作品に日本の神話や怪談、風習を数多く描きました。そんな彼を最も身近で支えたのが、セツ夫人でした。

「思い出の記」は、単なる回想録にとどまらず、明治という時代のなかで国際結婚を生き抜いた一人の日本人女性のまなざしが映し出された貴重な証言でもあります。

夫婦の日常、教育者としての八雲の姿、そして父としてのやさしさが、どこか懐か